

Ⅱ 食育を取り巻く現状と課題

1. 西条市食育推進計画（第2次）の目標と達成状況

第2次計画では、更なる実践に向けた施策を展開するために、11の指標目標を設定し、行政、地域、学校、家庭等を通して、乳幼児期から高齢期まで、食育の啓発、推進を行ってきました。第2次計画の指標目標について、食育に関するアンケート調査および既存の統計データ等における結果と比較すると達成状況は以下のとおりです。

	目標項目	2次計画未定時の値 (平成27年度)	2次計画目標値	現状値 (令和元年度)	評価
1	食育に関心を持っている市民の割合の増加	85.3%	90%以上	74.9%	△
2	食生活改善推進員、野菜ソムリエ等食育推進に関わるボランティアの数	583人	700人以上	465人	△
3	食事の際のあいさつをしている人の割合の増加	—	100%	幼児 84.7% 成人 55.5%	△ △
4	朝食を毎日食べる人の割合の増加	幼児 92.4%	100%	96.9%	○
		小学生 88.5%	100%	89.0%	○
		中学生 79.5%	100%	86.7%	○
		男性(20～30歳代) 60.0%	85%以上	73.5%	○
5	栄養バランスのとれた食事(主食・主菜・副菜のそろった食事)をしている人の割合の増加	—	80%以上	73.5%	△
6	生活習慣病の予防や改善のための適切な食事、運動等を継続的に実践している人の割合の増加	37.3%	50%以上	33.7%	△
7	よく噛んで味わって食べている人の割合の増加	38.5%	50%以上	39.8%	○
8	学校給食における地場産物を使用する割合の増加	31.1%	35%以上	43.9%	◎
9	買い物や食事に地元産(地産地消)を意識している人の割合の増加	45.2%	80%以上	38.4%	△
10	食の安全性を考慮し、食品を選択している人の割合の増加	80.1%	90%以上	74.4%	△
11	朝食又は夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数の増加	—	週に10回以上	※週に5.5回	△

◎目標値を達成している

○目標値を達成していないが、2次の基準を超えている

△目標値を達成していない

※共食の回数は、国の第3次食育推進基本計画と同様に、
「ほぼ毎日一緒に食べている」を週7回、「週に4、5日食べている」を4.5回、「週に2、3日食べている」を2.5回として、当該人数を掛け合計したものを全体数で割り、週当たりの回数を算出

【出典】項目1、3～7、9～11：食育に関するアンケート調査
項目2：平成30年度食育の推進に関わるボランティア数調査
項目8：平成30年度地場産物活用状況調査

2. 西条市食育推進計画に関する事業評価

第2次計画から各関係部署において、さまざまな食育関係の事業を実施し情報共有を行っています。下記の表は、2次計画期間の事業概要や評価及び課題です。

分野名	部署名	事業概要	評価及び課題
健康分野	健康医療推進課	○妊娠期や乳幼児においては、健診や健康教育、相談等を通じて、食事のマナーやバランスのとれた食事について啓発した。 ○壮中年期から高齢期においては、健康教育や健康相談を実施し、生活習慣病の予防や健康増進等、健康に関する正しい知識の普及を図った。 ○食生活改善推進員や健康づくり推進員等地域で「食」を通じた健康づくりを推進していく人材や団体の育成、支援内容の充実を図った。 ○特産品を使用した郷土料理マップや減塩レシピを作成・配布した。ホームページやフェイスブック等で、栄養に関する情報を発信した。	○生涯にわたって心も体も健康な生活を送るために、引き続き、健康教育、相談等を通じて正しい食生活を実践していけるよう支援していく必要がある。 ○教室の参加者が固定化している傾向があるため、健康無関心層対策を検討していく必要がある。 ○地区組織をうまく活用し、食文化の継承や正しい食生活の普及等、地域で食育を積極的に進めていく必要がある。 ○他部署の食育に関するイベント等を把握し、連携を密にした取り組みをしていく必要がある。
福祉分野	保育・幼稚園課	○給食の献立に、季節の食材や料理、行事食、地元の特産物などの食品を積極的に取り入れ、調理方法や食材に偏りがないように作成した。 ○自分たちで野菜を育て、収穫し、簡単な料理やおやつを調理したり、給食のお手伝いや当番活動に取り組むことで、友達や先生と食べることを楽しみ、子どもへ食に関する指導を実施するとともに、保護者向けの講話も実施した。	○行事食等、普段と違う給食は人手が多く必要で実施が難しいこともあるが、できる方法を考え、子どもたちに食の大切さを伝えていく必要がある。 ○保育所等で実施している取組を保護者の方にも理解してもらい、家庭でも実践できるように、家庭と連携していく必要がある。 ○食に関する指導内容を定着させるためにも、保育士等も協力して指導していく必要がある。

分野名	部署名	事業概要	評価及び課題
福祉分野	包括支援課	○介護予防教室等において、高齢者の食事や口腔ケアの正しい知識や技術について、普及啓発を行った。 ○栄養バランスに配慮した弁当を定期的に配達する「配食サービス」を実施し、食の自立支援を行った。	○高齢期は、加齢に伴う小食や食事の偏りから「低栄養」になりがちであるため、今後も教室等において、高齢者の正しい食生活についての知識や口腔の健康を保ち栄養を十分摂取できるよう普及啓発していく必要がある。 ○高齢世帯や単身世帯が増加する中、共食の機会が減少しているため、社会とのつながりを維持し、共食の機会を増やすことにより、食べることの楽しさを失わないことが大切である。
教育分野	学校教育課	○農家や野菜ソムリエ、企業活動等、関係機関・団体と連携を図り、地元の方が講師として児童が米や野菜を育てる勤労生産体験学習を通して、地元産業の理解と農産物への感謝の気持ちを育んだ。 ○給食学習で、栄養バランスが取れた食事の大切さを理解する学習を行い、食に関する指導の充実を図った。 ○社会科や産業の授業において、生産の苦労や加工・販売の学習を通じ、恵まれた地域資源の恩恵を受け、食文化が守られていることを理解し、食に対して感謝の醸成を図った。 ○栄養教諭による出前講座で、食の指導を実施した。	○今後も、地域の人材・機関と連携した学習活動や生活習慣病予防、改善につながる取組を推進する必要がある。

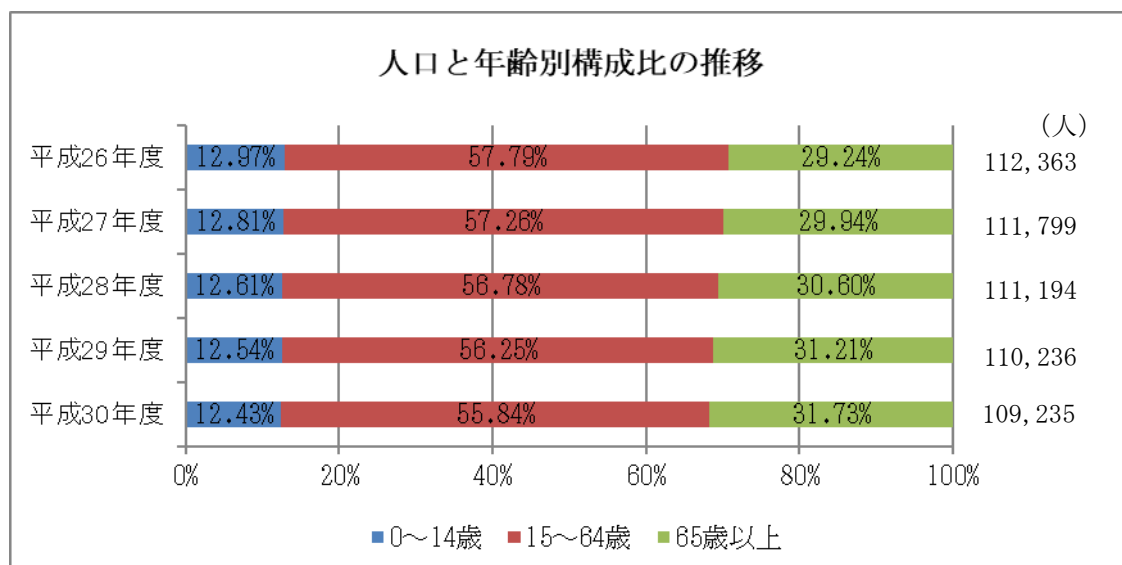
分野名	部署名	事業概要	評価及び課題
教育分野	教育総務課	○給食の献立に郷土料理、行事食等を取り入れ、地域の食文化の継承や、米は全て地元産を使用する等、給食を通じた地産地消の推進を図った。 ○地場産物を活用した事業（小中学生レシピコンクール）や「給食だより」配布による地場産物の活用を啓発した。	○年間通して地場産物を計画的に学校給食に取り入れるためには、食材の量・質の確保、価格の保持、配送方法、発注業者選定に課題がある。 ○文部科学省が示す栄養摂取基準を満たす学校給食を提供しているが、パン給食を継続するために、塩分の摂取基準を守ることが困難である。
	社会教育課	○公民館での食育講座や料理教室を開催したり、通学合宿事業や放課後子ども教室における料理作りを通して、食事指導や調理技術を習得する機会を提供した。 ○小中学校の参観日等で子育て講座を行い、早寝早起き朝ごはんの大切さ等食育についての学習を実施した。また、市特産野菜を使った調理実習で食育講座を行ったり、婦人会主催の子ども食堂では、地産地消に努めた。	○参加者が固定化し、教室運営協力者の確保が難しくなっている。 ○男性保護者の参加が少なく、食育を広く普及、啓発していく必要がある。
産業分野	農水振興課	○水産資源や伝統的食文化への理解向上を図るため、魚を使った高校生料理コンテストの活動支援を行った。また、幼児期から魚に触れ合う機会づくりのため、保育園等で魚のさばき方実演等の教室を行った。 ○地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い営農活動に取り組む団体を支援し、環境保全型農業を推進した。 ○産業祭への出展や米加工料理講習会の実施により、米消費拡大活動の推進を行った。 ○農業経営を安定化するための支援、都市と農村の交流活動の支援を実施した。	○米の消費量は、食の多様化やライフスタイルの変化に伴い、減少傾向にある。 ○農業者の高齢化や担い手の減少が課題となっている。
	産品販路開拓課	○食の創造館で地元産品を使った各種料理教室を開催したり、情報誌「SAKU: Re」を作成し、食材の魅力や料理のレシピを発信することで地元産品のPRを行った。 ○都市部での地元産品をPRするために、プロモーションやマッチング、加工食品の新規開発の実施を支援した。	○料理教室や情報誌の発刊により、地元産品の認知度は高くなった。 ○各事業により、地元産品の域外販路開拓、産品PRができています。

3. 食育をめぐる本市の現状

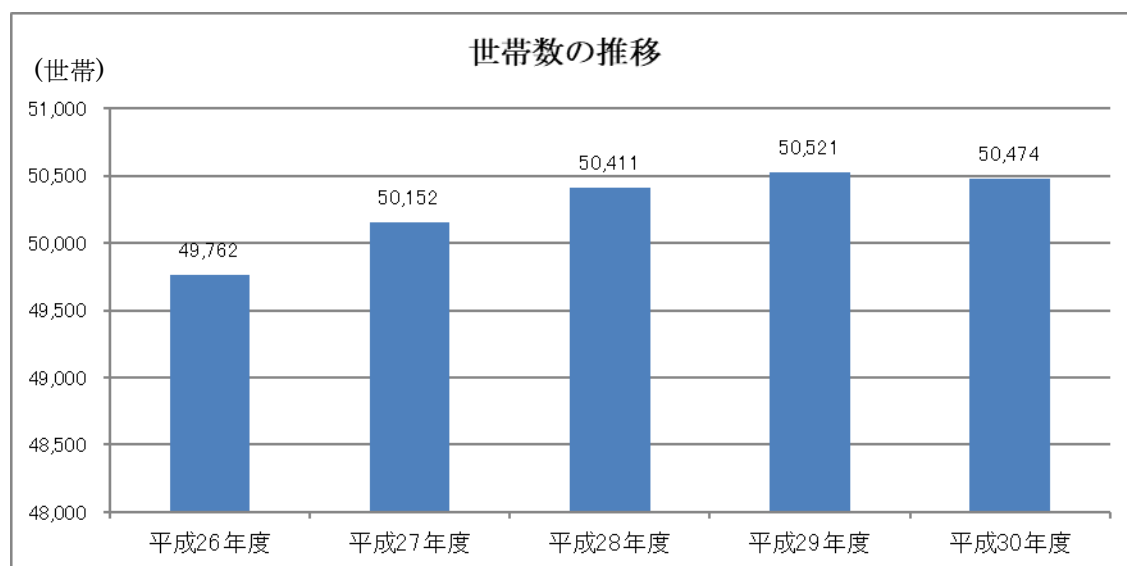
(1) 西条市の特徴

① 人口動向

人口は毎年減少しています。人口の年齢別構成比では、0～14歳の年少人口および15～64歳の生産年齢人口が減少し、65歳以上の高齢人口が増加傾向となっています。



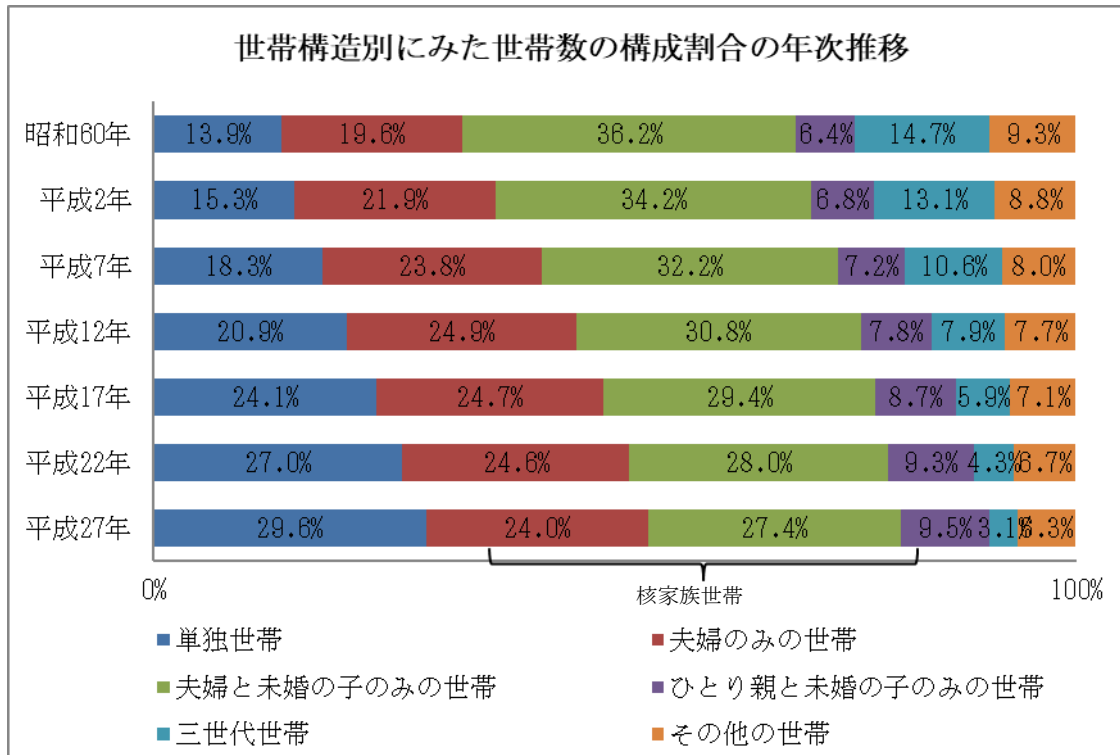
出典：西条市統計



出典：西条市統計

② 世帯状況

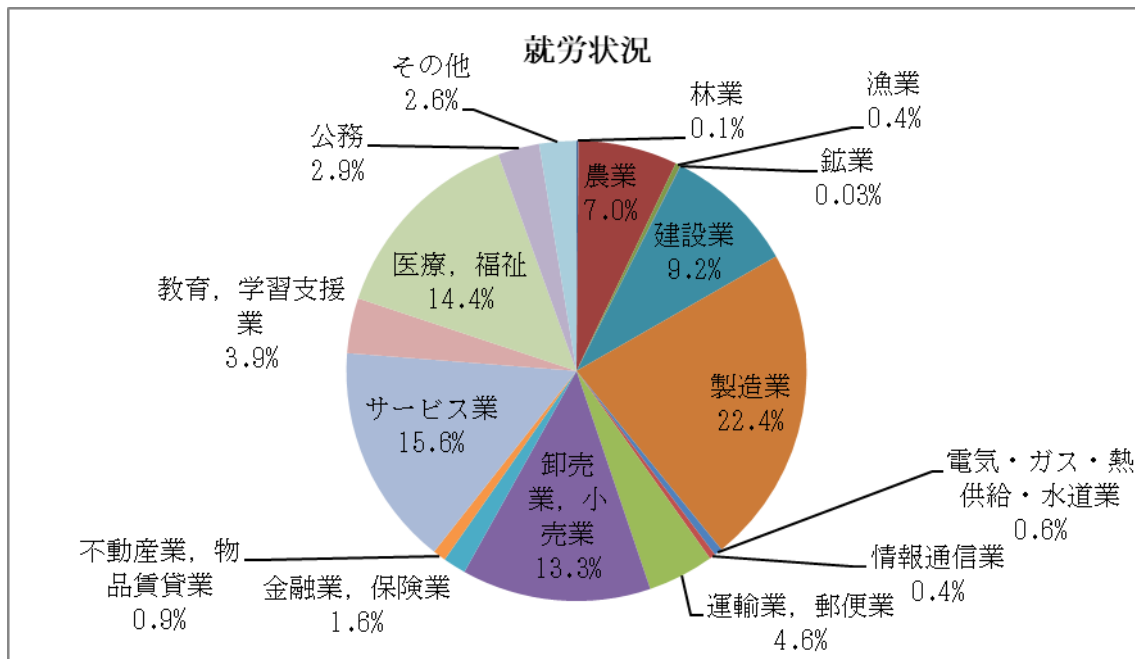
世帯状況をみると、単独世帯と核家族世帯が増加傾向にあります。



出典：国勢調査（平成 27 年）

③ 就労状況

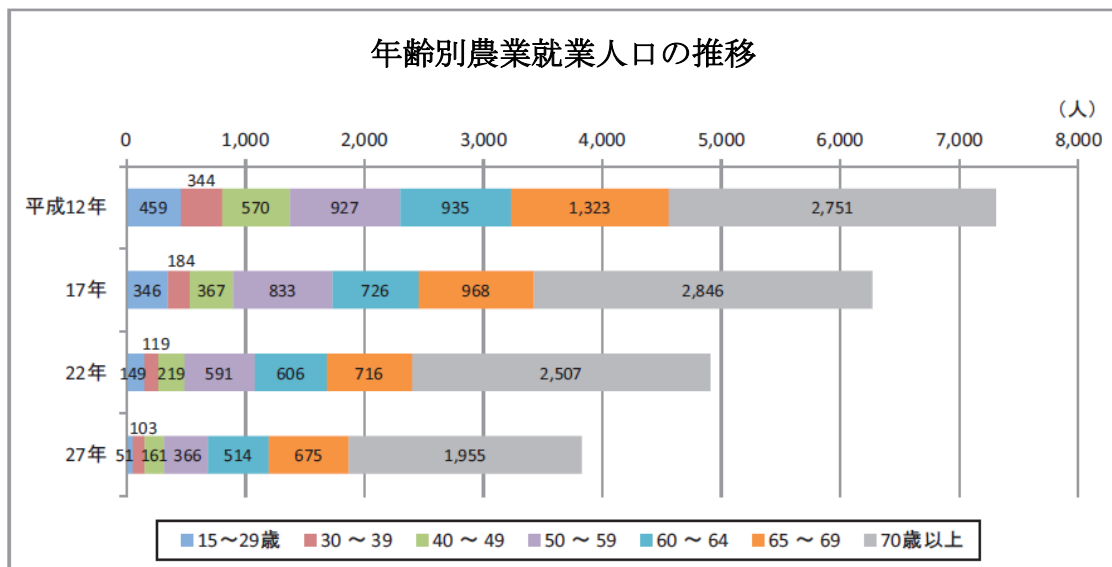
産業（大分類）別就労状況をみると、第1次産業は 8.4%、第2次産業は 33.3%、第3次産業は 58.3%で、農業、林業、漁業、鉱業などの生産業の割合が少ない現状です。



出典：国勢調査（平成 27 年）

④ 農業人口

農業人口は、年々減少しています。平成 27 年は、3,825 名であり、平成 22 年と比較すると、22%減少している状況です。また、65 歳以上の農業従事者は平成 22 年と比較すると 3.3%増加しており、農業就業人口においても高齢化が進んでいます。



出典：農林業センサス



地元で採れた野菜

(2) 健康分野

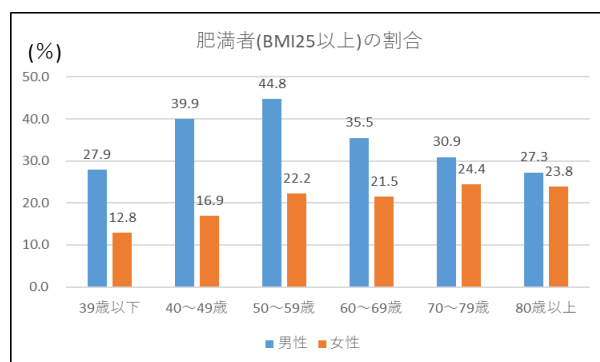
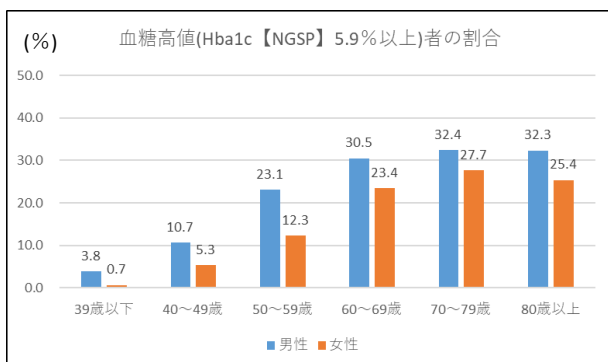
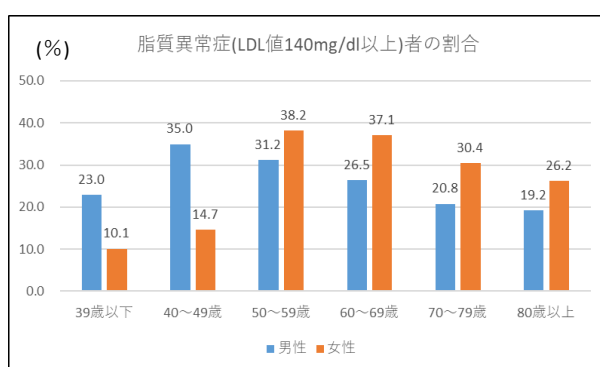
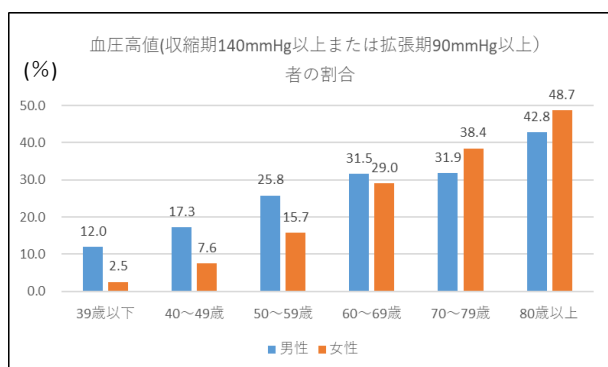
① 健康診査結果

血圧高値（収縮期 140mmHg 以上または拡張期 90mmHg 以上）者の割合は、年齢とともに増加しています。

脂質異常症（LDL 値 140mg/dl 以上）者の割合は、男性では 40 歳代及び 50 歳代、女性では 50 歳代及び 60 歳代が多くなっています。

血糖高値（HbA1c【NGSP】5.9%以上）者の割合は、男女とも年齢が高くなるにつれ増加しており、70 歳代が最も多くなっています。

肥満（BMI25 以上）者の割合は、どの年代も男性の方が高い状態であり、年代別では、男性の 50 歳代が高い結果となっています。



出典：健康診査結果（平成 30 年度）



総合健診

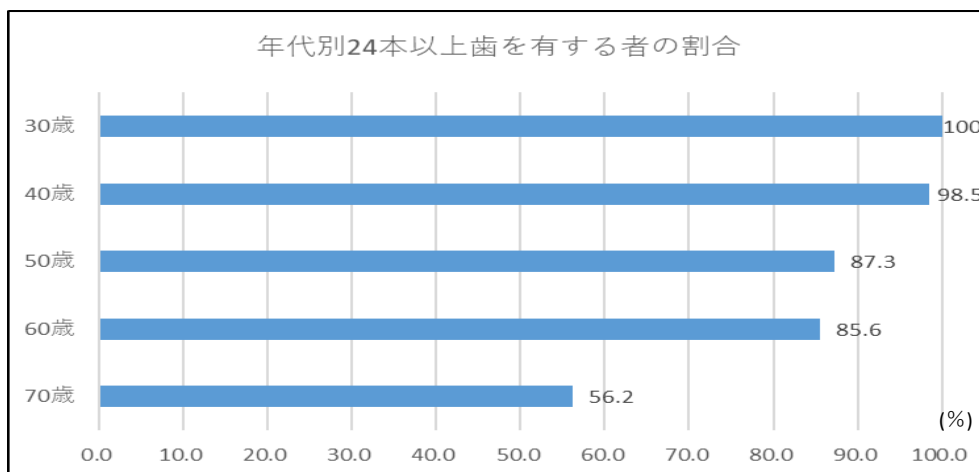


栄養講座

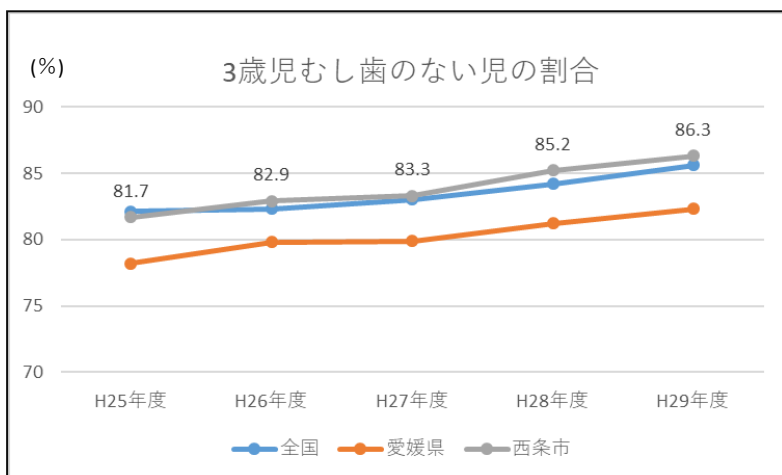
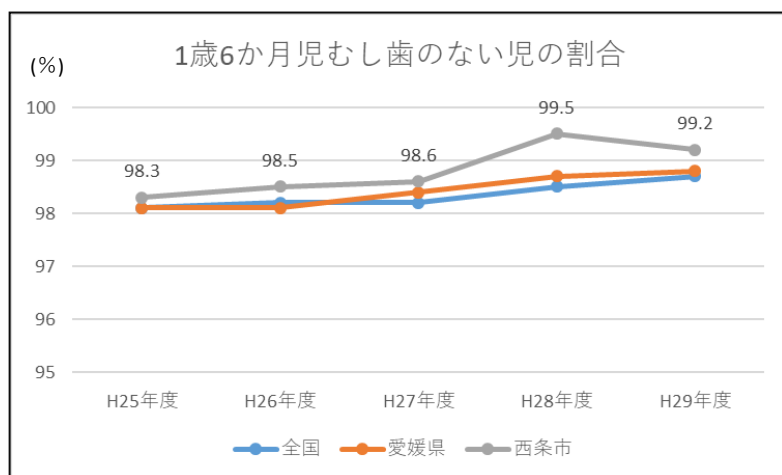
② 歯科健診結果

成人歯科健診結果について、歯の本数は年齢とともに減っており、70歳で24本以上歯を有する者は56.2%です。

幼児歯科健診結果について、平成29年度のむし歯のない児の割合は、1歳6か月児健診で99.2%、3歳児健診で86.3%であり、全国、県平均と比較すると、その割合は高くなっています。



出典：成人歯科健診結果（平成30年度）



出典：母子保健統計

3歳児健診



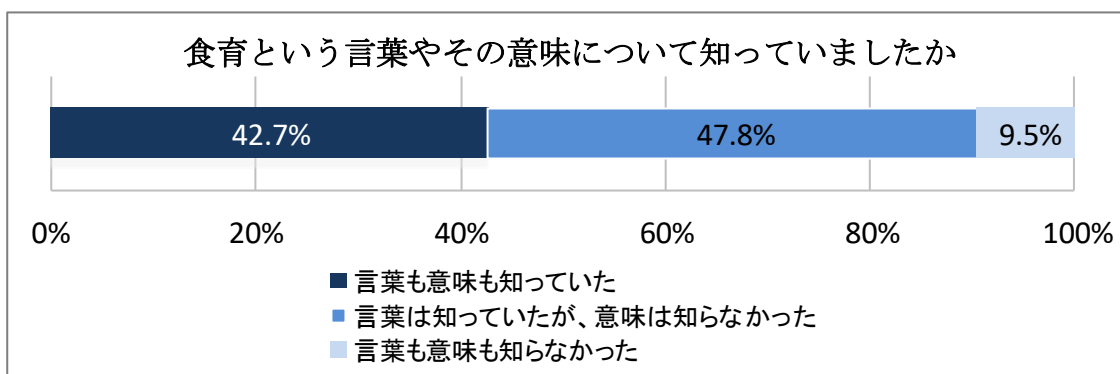
(3) 食育に関するアンケートの結果（市民）

平成 31 年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）及び平成 30 年度西条市食生活調査によると、本市の食育をめぐる現状は次のとおりです。

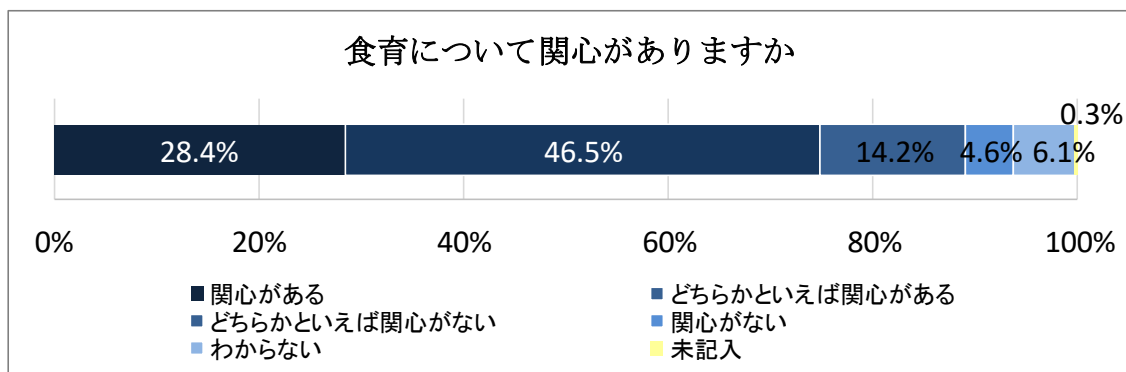
① 食育への関心

食育の言葉を知っている者の割合は 90.5%ですが、その中の半数以上は「言葉は知っていたが、意味は知らなかった」となっています。

食育の関心については「関心がある」は 28.4%ですが、「どちらかといえば関心がある」を含めると 74.9%になります。



出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）

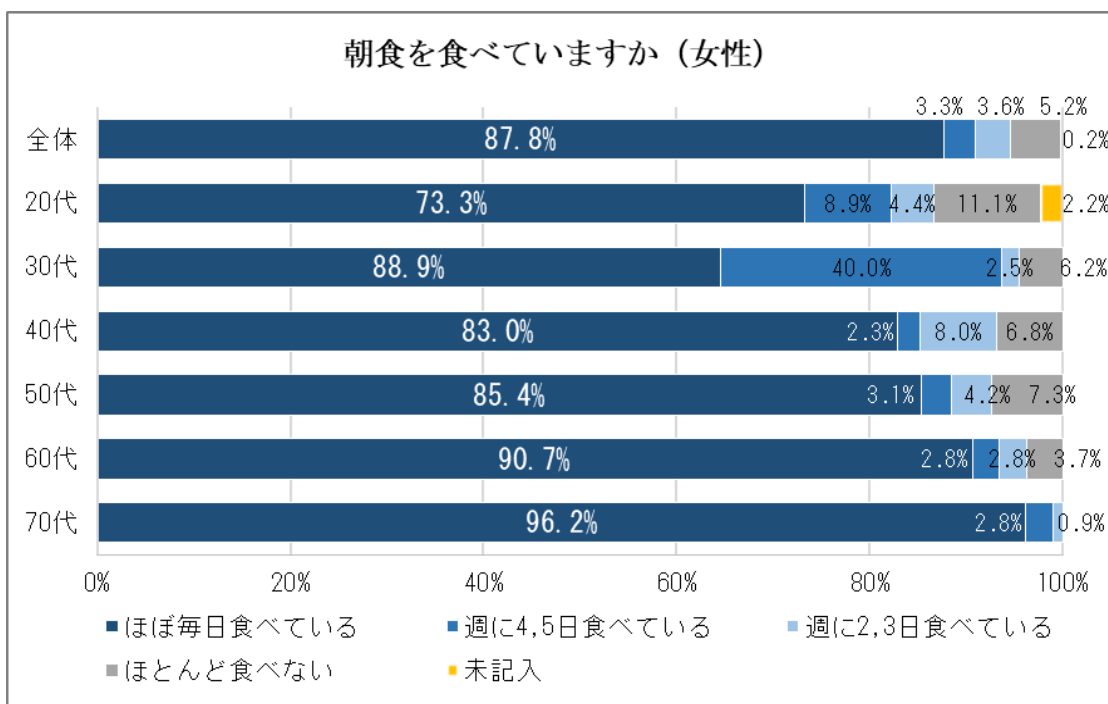
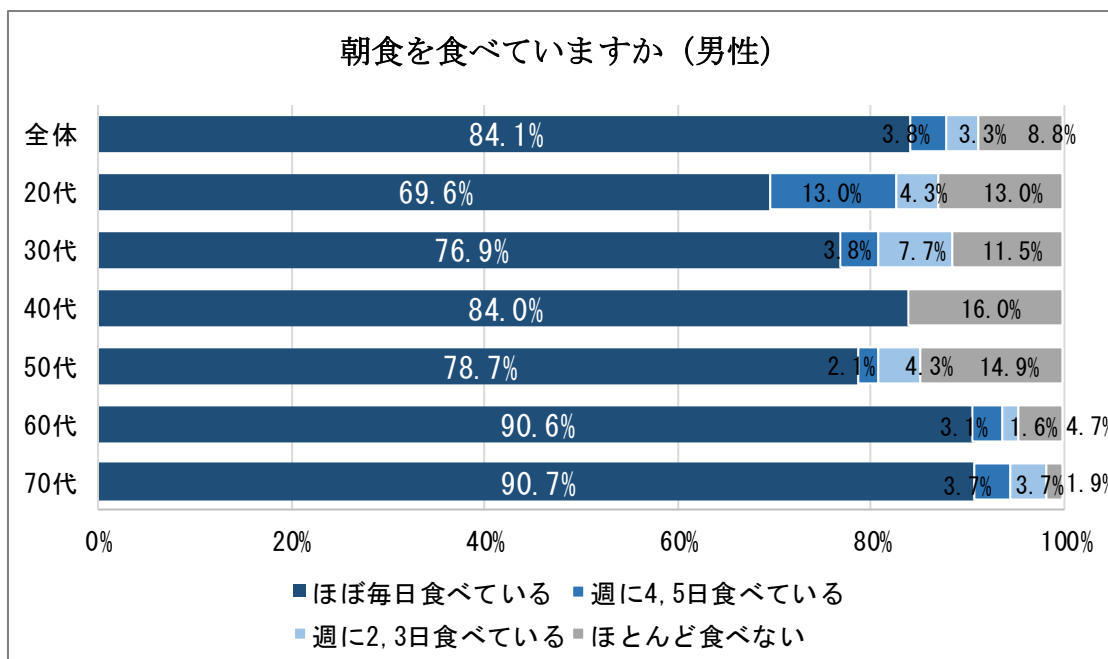


出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）

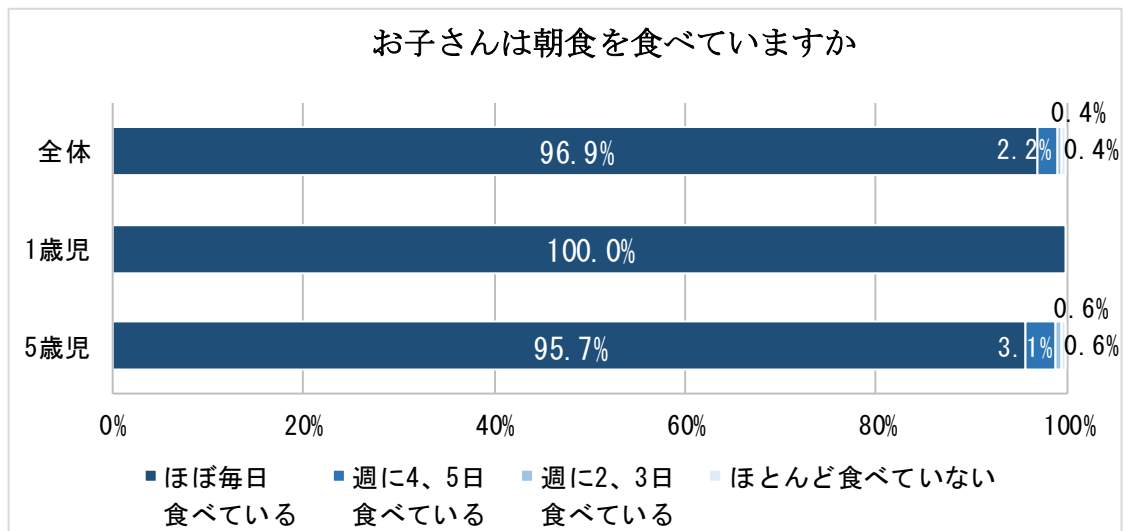
② 朝食の摂取状況

朝食をほぼ毎日食べている者の割合は、60～70 歳代は9割を超えていますが、20 歳代から50 歳代では、朝食の欠食率が高くなっています。

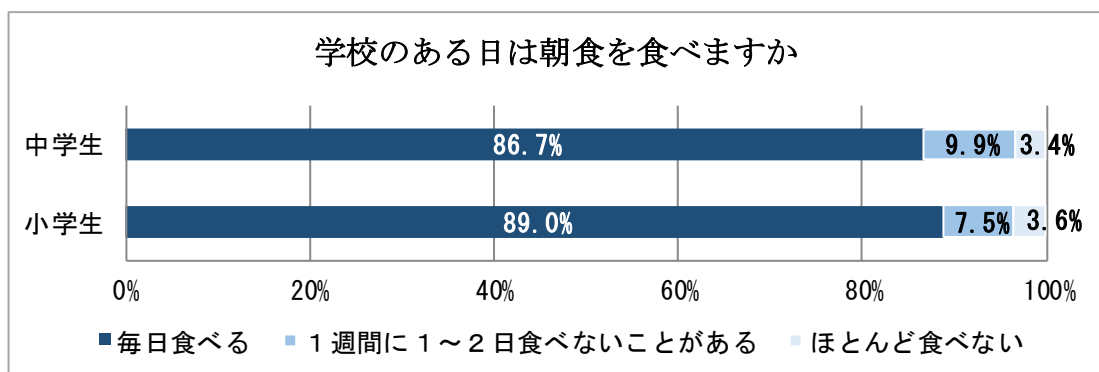
朝食をほぼ毎日食べている割合は、1 歳児では100.0%、5 歳児では95.7%、小学生では89.0%、中学生では86.7%と年齢とともに減少傾向にあります。



出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）



出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）

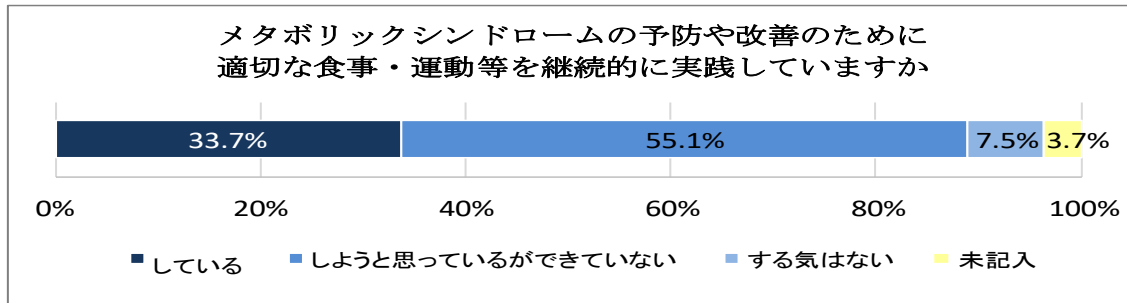


出典：平成30年度西条市食生活調査

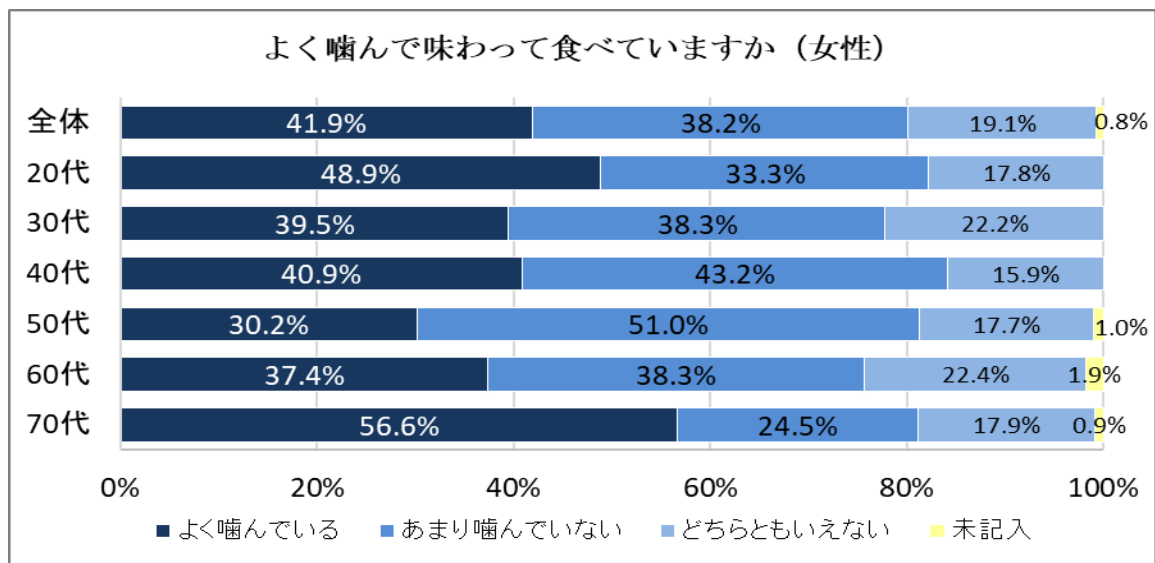
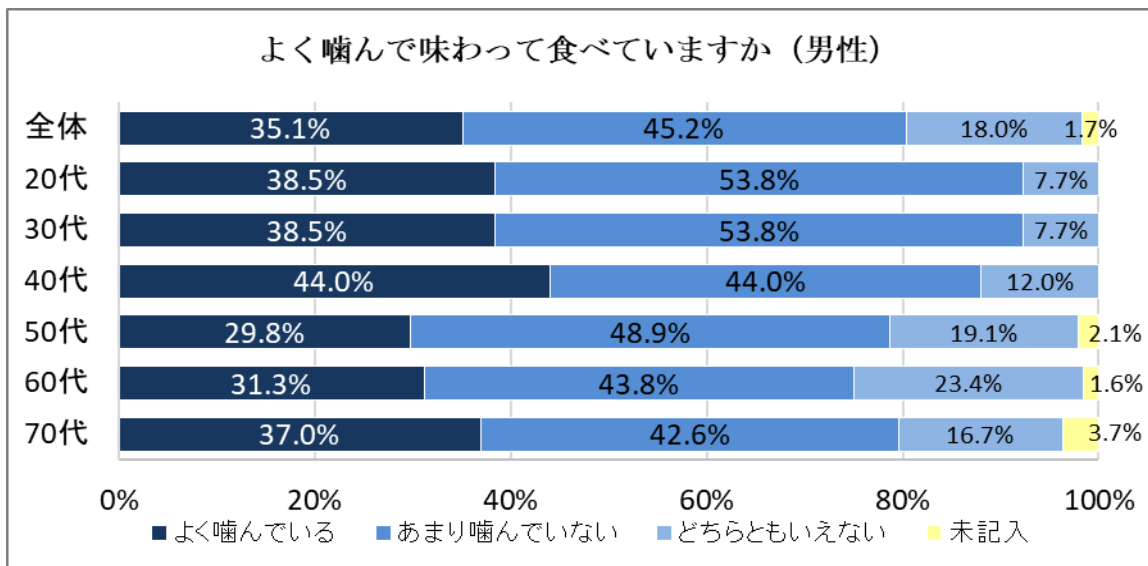


③ 生活習慣病予防のための実践状況

メタボリックシンドロームの予防や改善のために、適切な食事・運動を継続的に実践している者の割合は、33.7%となっています。半数以上の者は、「実践しようと思っているができていない」という結果になっています。また、よく噛んで味わって食べている者の割合は、男女とも約4割の者が「あまり噛んでいない」という結果になっています。



出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）

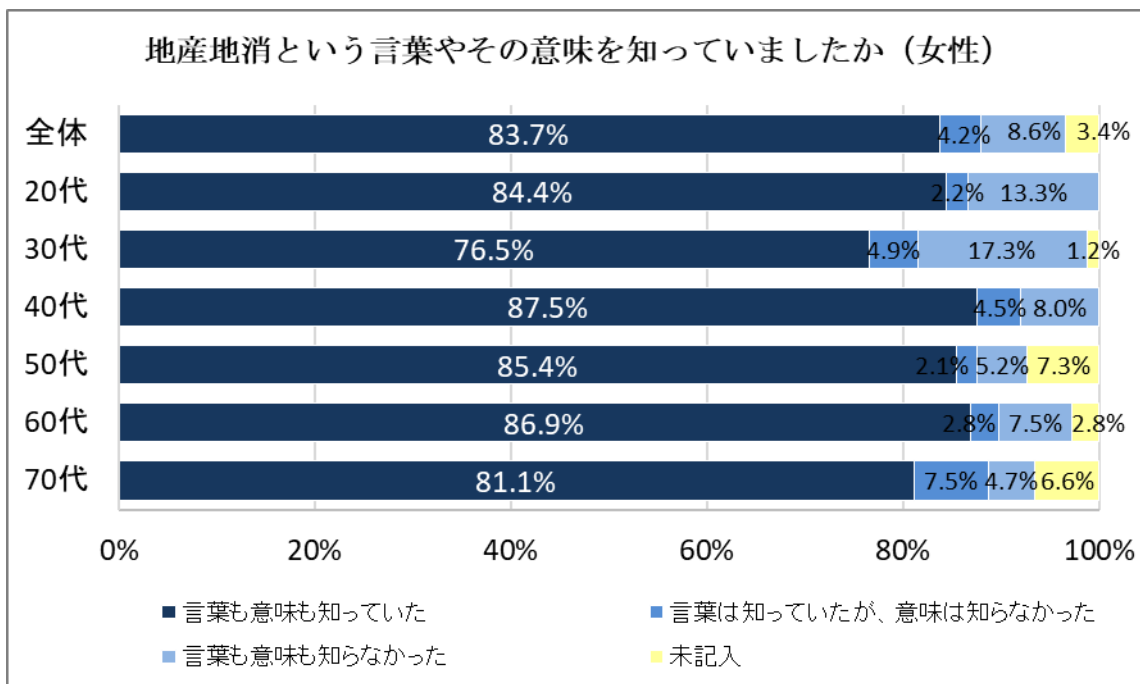
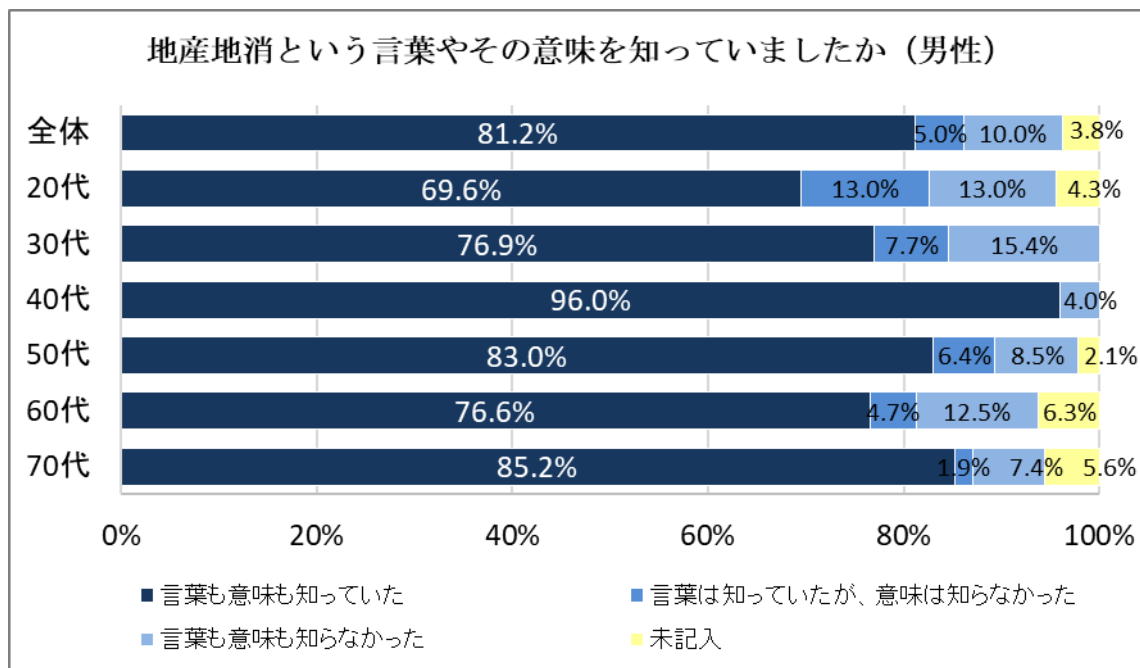


出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）

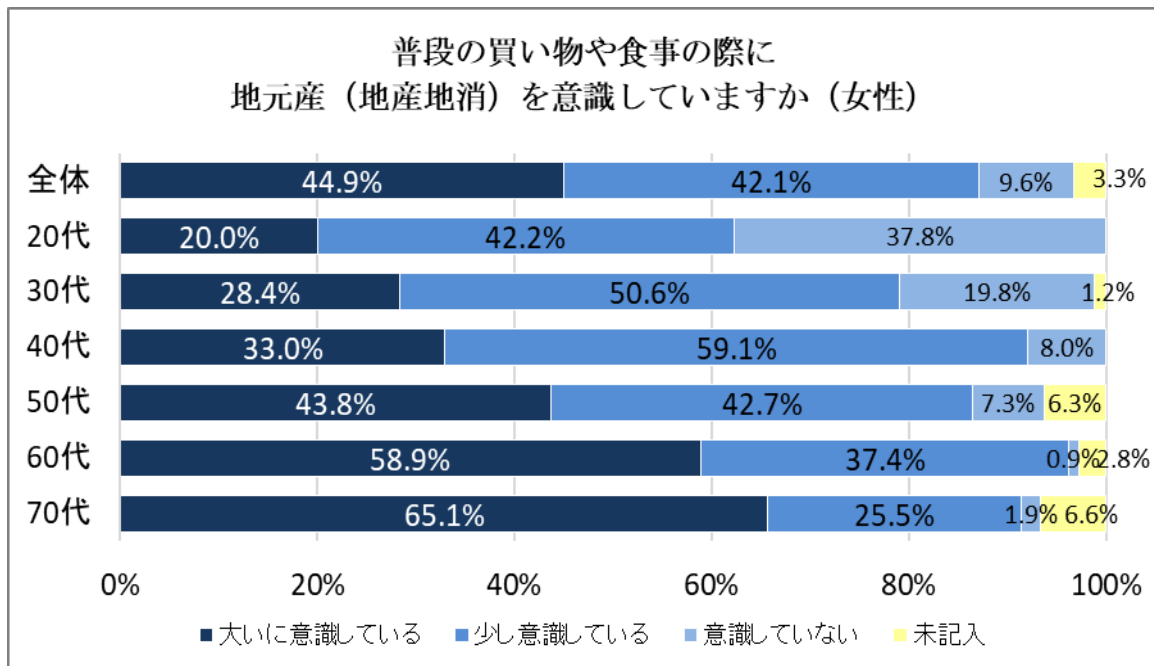
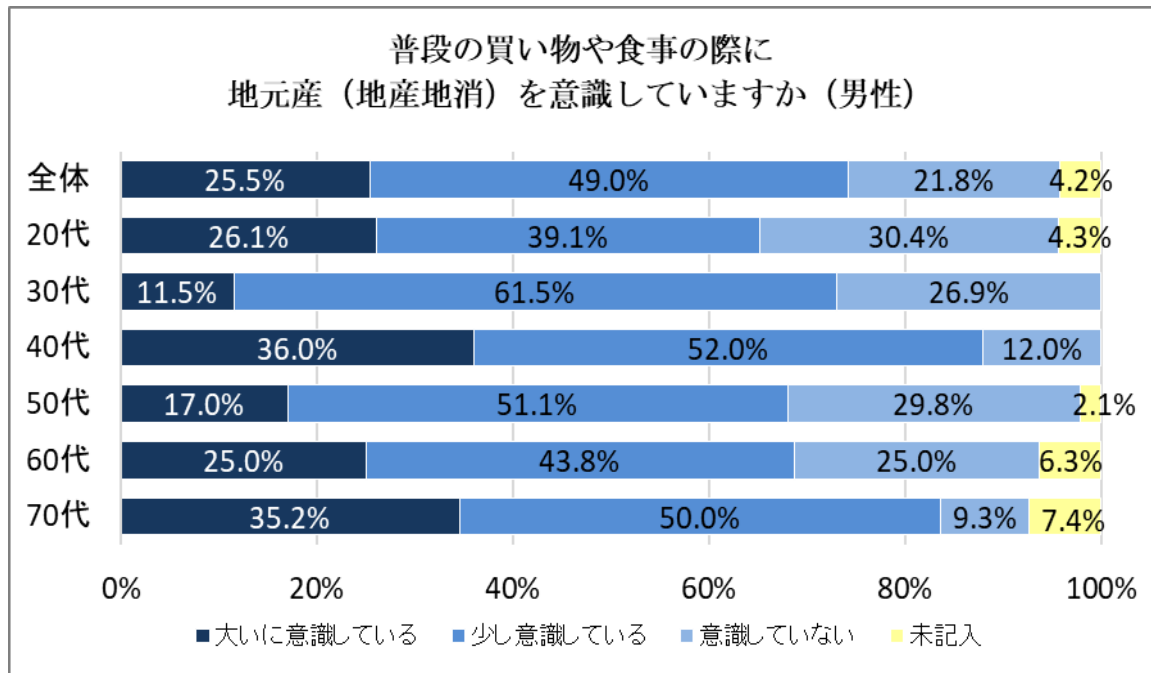
④ 地産地消の認知状況

地産地消について、男女とも約7～8割の者が「言葉も意味も知っていた」という結果となっています。男女ともに40歳代の割合が最も高くなっています。

普段の買い物や食事の際に地産地消を意識しているかについては、年齢が高くなるほど、「大いに意識している」者の割合が高くなっています。一方、意識していない者の割合は、男女とも20歳代が3割を超えています。



出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）

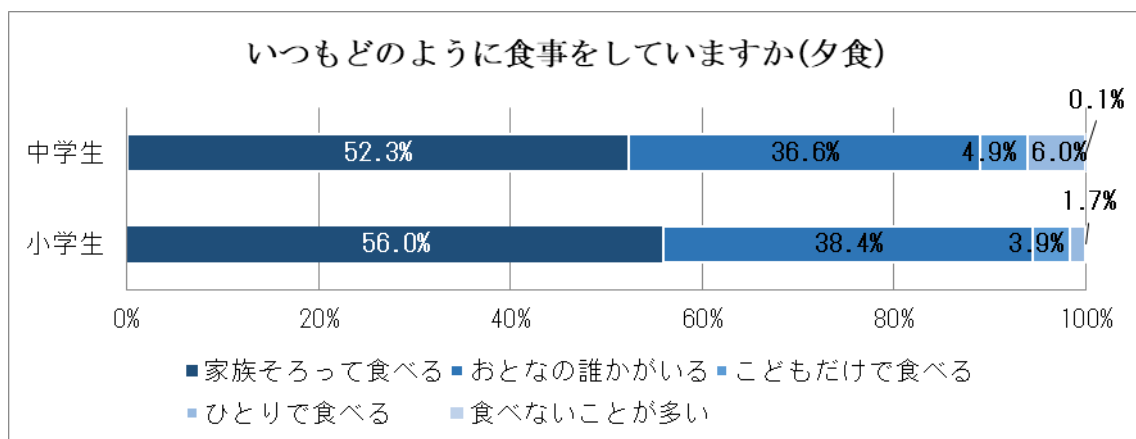
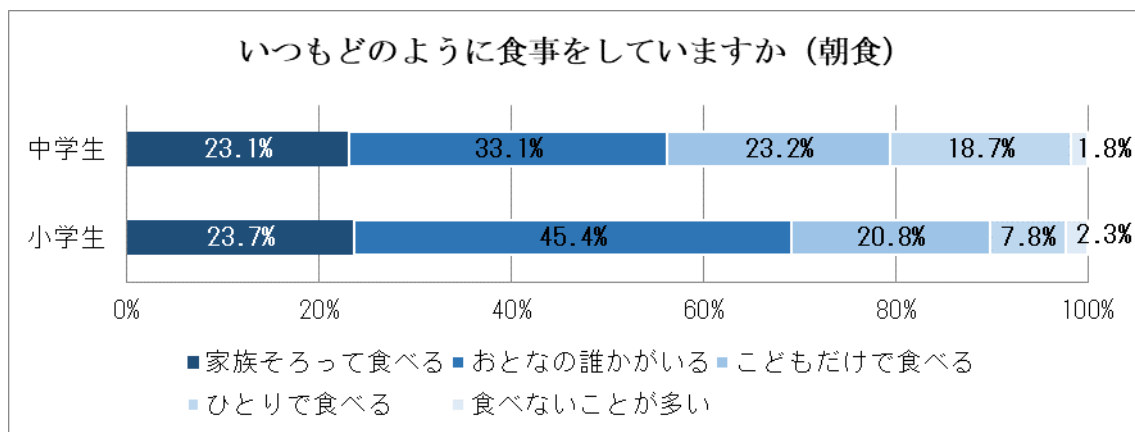


出典：令和元年度西条市食育に関するアンケート調査結果（市民）

⑤ 共食について

朝食を一緒に誰かと食べている者の割合は、小学生では 89.9%、中学生では 79.4%となっており、年齢が上がるとともに減少傾向にあります。

夕食を一緒に誰かと食べている者の割合は、小学生では 98.3%、中学生では 93.8%となっています。朝食時よりは、夕食時の方が家族そろって食べています。



出典：平成 30 年度西条市食生活調査

4. 食育をめぐる本市の課題

第2次計画の達成状況、関連事業の実施状況、西条市の特徴、健康分野、食育に関するアンケートの調査結果を踏まえると、西条市の食をめぐる主な課題は以下のようにまとめられます。

(1) 食育への関心

食育に関する市民アンケート調査によると、食育の関心について「関心がある」「どちらかといえば関心がある」者の割合は、74.9%となっています。また、「食育」の言葉を知っている者の割合は90.5%ですが、その内の半数以上は「言葉を知っていたが、意味は知らなかった」となっており、どちらの割合も平成26年度の調査と比較すると減少しています。

西条市として、より一層、食育推進に係る関係機関との情報共有及び連携を行い、ライフステージごとに幅広く、食育の普及啓発を行い、市民一人ひとりが関心を持って自ら食育に取り組み、実践の輪を広げていくことが必要になります。

(2) 朝食の摂取状況

幼児のほぼ毎日朝食を食べている割合は、1歳児では100.0%であるのに対し、5歳児では95.7%、小学生では89.0%、中学生では86.7%と年齢とともに減少傾向にあります。また、ほぼ毎日朝食を食べている人の割合は、成人では86.4%となっており、平成26年度の調査と比較すると減少しています。特に、20歳代から50歳代の朝食欠食率が高くなっています。

基本的で健やかな食生活のリズムを身につけるために、引き続き、妊娠期から朝食の大切さや規則正しい食生活の重要性について周知し、幼児期から規則正しい生活リズムの実践を促進していく必要があります。

(3) 生活習慣病予防及び歯の健康のための実践状況

死因別死亡者の割合をみると、生活習慣に起因する疾患は全体の約6割を占めています。健康診査の結果では、血圧・血糖高値者については年齢とともに増加し、脂質異常者については、男性では40～50歳代が高く、女性では50～60歳代が高くなっています。また、肥満者の割合は、どの年代も男性が高くなっています。

しかし、食育に関するアンケート調査によると、メタボリックシンドローム予防や改善のために、適切な食事・運動を継続的に実施している者の割合は33.7%となっており、「実践しようと思っているができていない」者の割合は55.1%となっています。生活習慣病を予防するには、若い時からバランスの良い食事や運動を継続することが重要になります。

また、よく噛んで味わって食べているかについては、男女とも約4割の者が、食事の際に「あまり噛んでいない」という結果になっています。引き続き乳幼児期から噛み方や食べる速さにも着目した食育を実践し、健診や健康教育の場などのあらゆる場を活用し実践につなげていく必要があります。

歯の健康状態については、70歳で24本以上歯を有するものが56.2%となっています。歯の健康を維持することは、食生活を豊かにし、健康の維持増進につながるため、若年層から

むし歯・歯周病予防の取り組みを促進していく必要があります。

（４）地産地消の認知状況

食育に関する市民アンケート調査によると、「地産地消」について、約８割の者が「言葉も意味も知っていた」という結果になっています。普段の買い物や食事の際に、地元産（地産地消）を意識しているかについては、年齢が高くなるほど「大いに意識している」者の割合が高くなっていますが、平成 26 年度の調査と比較すると減少しています。特に、20 歳代では「意識していない」者の割合が３割を超えています。

今後も、妊娠期から食に関する幅広い情報を市民に提供し、体験や講義などの活動を通して、地産地消の素晴らしさや大切さを積極的に伝えていく必要があります。

（５）共食について

小中学校の児童・生徒の生活調査結果によると、朝食を一緒に食べる人がいる割合は、小学校では 89.9%、中学校では 79.4% となっており、年齢とともに減少傾向にあります。また、夕食に比べると朝食の共食率は低くなっています。

市の人口動態では、人口は徐々に減少傾向にありますが、世帯数は横ばいで減少しておらず、単独世帯が増加傾向にあります。

家族や友人等が食卓を囲んで共に食事を取りながらコミュニケーションを図ることは、食育の原点と言えます。家族形態や生活様式は様々に変化していますが、積極的に共食の大切さを伝え、推進していく必要があります。